

# 国指定史跡の新指定および追加指定について

## (1) 新指定の史跡

### ◆ 飯盛城跡 (いいもりじょうあと)

#### <指定対象の所在地>

大阪府大東市大字北條・四條畷市大字南野

#### <説 明>

飯盛城跡は大阪府東部の大東市大字北條・四條畷市大字南野に所在し、奈良県との府県境をなす生駒山地の北支脈である飯盛山に立地する山城です。飯盛城は、飯盛山の山頂一帯に南北約 700m、東西約 400mの城域を有し、北方向では京都盆地から比叡山を、西方向に六甲山地から淡路島まで眺望でき、眼下には河内平野を一望できます。

飯盛城は、文献上では享禄3年(1530)に木沢長政の居城として初めて登場します。その後、安見宗房の時代を経て、永禄3年(1560)には三好長慶が入城して、京と畿内を支配した三好政権の中枢として機能するとともに、連歌や茶の湯等の当時最先端の文化交流の場ともなりました。飯盛城に関する寺社文書や公家の日記、軍記物等、豊富な史料が残されており、また、城を訪問したイエズス会宣教師を通じて、ヨーロッパで刊行された文献や地図でも紹介されています。そして、長慶の死後、養子の三好義継が若江城に居城を移した永禄12年(1569)ごろに城郭としての機能を失ったと考えられています。

城域の調査は昭和初期から実施されてきましたが、平成23年度には大東市・四條畷市教育委員会による詳細な分布・測量調査が実施され、南北約 700m、東西約 400mの城域に多数の曲輪や石垣、土塁、竪堀、畝状空堀群などの遺構が良好に残されていることが判明しました。さらに、平成28年度から30年度の発掘調査によって城郭の構造や各曲輪の性格が明らかにされました。特に、曲輪の形態と出土する遺構・遺物から、

北エリアは防御空間として、南エリアは居住空間として使用されたことが判明しました。また、城の全域に石垣が多用され、それらが良好に保存されていることから、戦国時代末期における石垣の構築技術を示す貴重な事例となっています。さらには、礎石建物<sup>そせきたてもの</sup>や瓦の利用も確認されたことから、近世の「織豊系城郭」<sup>しよくほうけいじょうかく</sup>の3つの要素とされる石垣・礎石建物・瓦を先行して取り入れたものと位置付けられ、城郭史上も重要な城跡です。



飯盛城跡 遠景（北西から）【大東市・四條畷市教育委員会提供】



飯盛城跡 三次元航空レーザ計測による赤色立体地図（左が北）  
【大東市・四條畷市教育委員会提供】



飯盛城跡 帯曲輪の斜面に築かれた石垣【大東市提供】

(2) 今回追加指定される史跡

## ◆ 高安千塚古墳群（たかやすせんづかこふんぐん）

<追加指定対象の所在地>

大阪府八尾市大字服部川、郡川5丁目

<説明>

高安千塚古墳群は、大阪府東部の八尾市大字服部川<sup>おおあぎはつとりがわ</sup>を中心に、奈良県との府県境をなす生駒山系<sup>いこま</sup>の高安山西麓<sup>たかやすやま</sup>の尾根上に立地します。230基にのぼる古墳が<sup>おおくぼ</sup>大窪・<sup>やまたけ</sup>山畑支群、<sup>こおりがわ</sup>服部川支群、郡川北支群、郡川南支群の4つの支群にわかれて分布します。

高安千塚古墳群は6世紀代を中心とする畿内有数の大規模群集墳<sup>ぐんしゅうふん</sup>で、その造営は6世紀前半に開始されました。古墳群の開始期には石室<sup>せきしつ</sup>の形状や副葬品<sup>ふくそうひん</sup>に渡来系集団<sup>とらいけい</sup>との関わりがうかがえますが、最盛期の6世紀後半には大和の大型横穴式石室<sup>やまと よこあなしきせきしつ</sup>に準ずる規模の石室が造られるようになることが判明しています。こうしたことから、高安千塚古墳群は、その眼下に広がる河内平野に居住した渡来系集団と地域社会とのかかわりを考える上で重要な事例であるとして、平成27年に一部が国史跡に指定されました。

今回の追加指定地は、高安千塚古墳群の中心的な支群である服部川支群の一部と<sup>こおりがわにしづかこふん</sup>郡川西塚古墳です。このうち、郡川西塚古墳は高安千塚古墳群の西方約1km、高安山西麓から続く扇状地<sup>せんたんぶ</sup>の扇端部に造られた全長約62mの前方後円墳<sup>ぜんぽうこうえん</sup>です。埋葬施設の横穴式石室は、この地域における初期段階の事例であり、鏡や垂飾<sup>すいしよくつきみみかざり</sup>付耳飾など豊富な副葬品を有していることから、ここに葬られた被葬者は朝鮮半島からの文化や技術をいち早く導入できた人物と考えられます。この古墳の築造後、同じく横穴式石室を埋葬施設とする群集墳の造墓が開始されたことから、高安千塚古墳群の出現を考える上で重要な古墳です。

八尾市教育委員会が平成27年から令和元年にかけて実施した郡川西塚古墳の発掘調査では、墳丘斜面<sup>ふきいし</sup>の葺石が良好に残ることや、盾形の周濠<sup>たてがた</sup>と周堤<sup>しゅうごう</sup>と周堤<sup>しゅうてい</sup>を有し、その斜面にも葺石があることなどが明らかになっています。



高安千塚古墳群 郡川西塚古墳 遠景（南西から）【八尾市提供】



高安千塚古墳群 服部川支群の代表的な横穴式石室  
（既指定：服部川7号墳）【八尾市提供】

## ◆ 古市古墳群（ふるいちこふんぐん）

古室山古墳 赤面山古墳 大鳥塚古墳 助太山古墳 鍋塚古墳 城山古墳 峯ヶ塚古墳  
墓山古墳（はかやまこふん） 野中古墳 応神天皇陵古墳外濠外堤（おうじんてんのうりょうこふんがいごうがいてい） 鉢塚古墳 はざみ山古墳 青山古墳 蕃所山古墳 稲荷塚古墳 東山古墳 割塚古墳 唐櫃山古墳 松川塚古墳 浄元寺山古墳 白鳥陵古墳周堤 仲姫命陵古墳周堤

### <追加指定対象の所在地>

墓山古墳 大阪府羽曳野市白鳥3丁目

応神天皇陵古墳外濠外堤 大阪府羽曳野市誉田3丁目

### <概要>

古市古墳群は、4世紀後半から6世紀中頃にかけて形成された、巨大な前方後円墳ぜんぽうこうえんぶんを含む古墳群です。大型前方後円墳をはじめ中・小型の円墳えんぶん・方墳ほうぶんなど多様な古墳で構成され、日本列島の古墳時代を考える上で重要な古墳群であると評価されています。現在、墳丘が残存する古墳は45基となっており、そのうち22基の古墳が史跡指定されています。

今回、墓山古墳と応神天皇陵古墳外濠外堤の一部で、条件の整った区域が追加指定されます。



古市古墳群 遠景（南から）【羽曳野市教育委員会提供】

## 墓山古墳（はかやまこふん）

墓山古墳は、古市古墳群のほぼ中央部に所在する、墳丘長 225m の大型前方後円墳で、古市古墳群の中で 5 番目の規模をもちます。確認されている副葬品<sup>ふくそうひん</sup>や出土埴輪<sup>はにわ</sup>などから古墳時代中期、5 世紀前半ごろに築造されたと考えられています。現在、墳丘部分は『応神天皇惠我藻伏岡 陵 飛地ほ号』<sup>おうじんてんのうえがのもふしのおかのみささぎとびち</sup>として宮内庁によって管理されています。

これまでの発掘調査で、墓山古墳の周囲には幅約 18m の周濠<sup>しゅうごう</sup>がめぐり、その外側に幅約 32m の周堤<sup>しゅうてい</sup>が全周していたことが確認されています。さらに、この周堤の内側斜面には葺石<sup>ふきいし</sup>が施されていたことや、一部では周堤の外縁にそって幅 5m の溝が巡っていることが明らかになっています。

今回の追加指定地は、墓山古墳のくびれ部南側に位置し、これまでの調査成果から復元される周堤の上に当たります。



墓山古墳 遠景（南東より）【羽曳野市教育委員会提供】

## 応神天皇陵古墳外濠外堤（おうじんてんのうりょうこふん がいごうがいてい）

応神天皇陵古墳は、古市古墳群の中心となる大型前方後円墳です。確認されている出土埴輪などから、古墳時代中期の中ごろ、5世紀前半ごろに築造されたと考えられています。墳丘長425mというその規模から、同時代の古墳のなかでも盟主的な存在といえます。現在、墳丘から内堤までが『ないてい 応神天皇おうじんてんのう 我えがの 藻も 伏ふし 岡おか 陵のみささぎ』として、宮内庁によって管理されています。

これまでの発掘調査で、現況で確認できる幅約60mのないごう 内濠と幅約35mの内堤の外側に、さらにがいごう 外濠とがいてい 外堤を設けていたことが明らかになっています。全体の墓域は東西約650m、南北約700mにもおよび、外堤上または外堤に接して、規則的に配置された数基のばいちよう 陪塚が存在します。

今回の追加指定地は、応神天皇陵古墳の南西部に位置し、これまでの調査成果から復元される外堤と、陪塚とされるひがしやまこふん 東山古墳とが接する部分にあたります。



応神天皇陵古墳外濠外堤 遠景（南西から、左下に方形にのこる林が東山古墳）  
【羽曳野市教育委員会提供】



## ◆ 国府遺跡（こういせき）

---

<追加指定対象の所在地>

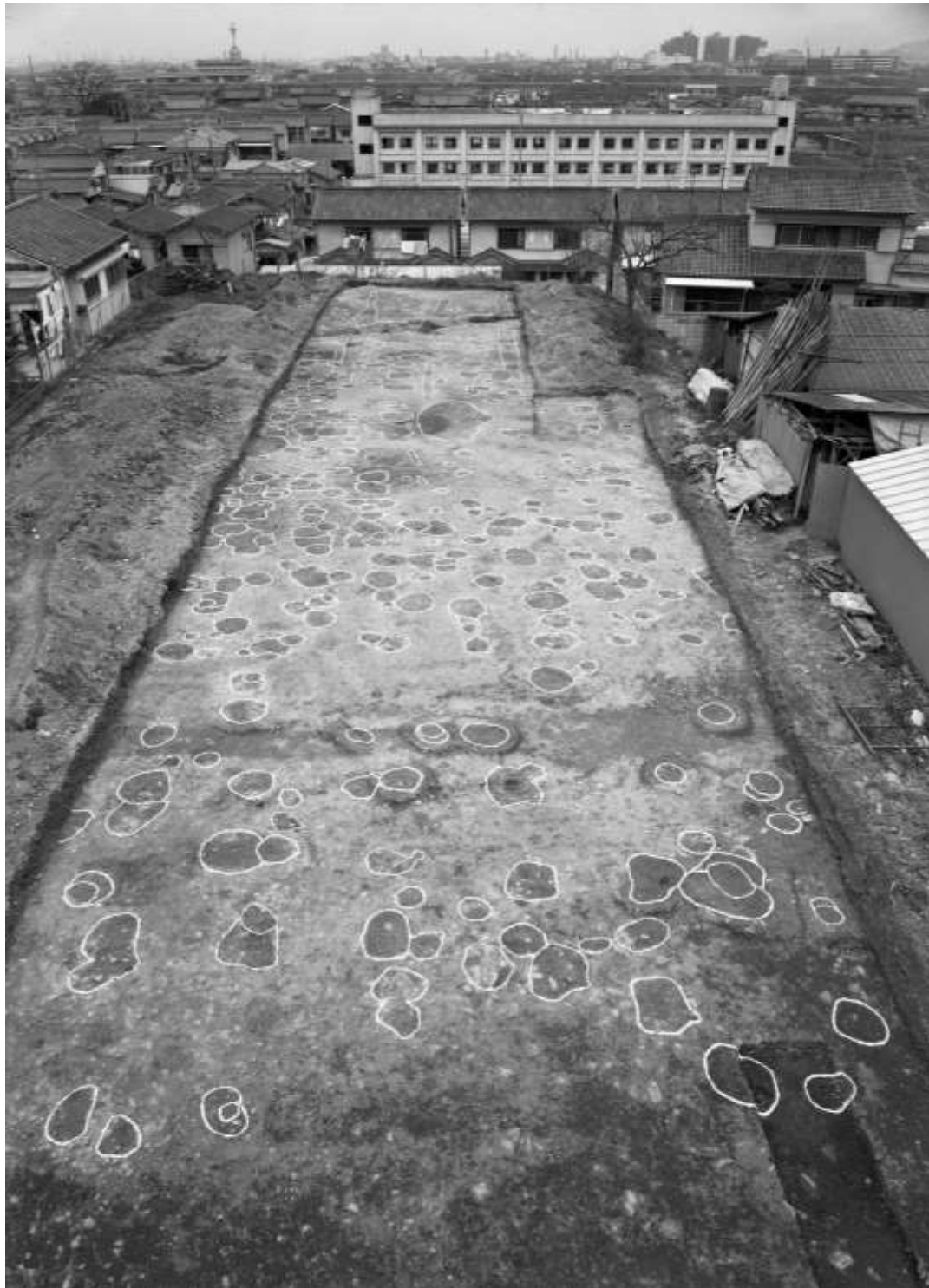
大阪府藤井寺市惣社2丁目

<概 要>

国府遺跡は、大和川と石川の合流点の西方、沖積平野に向かって南方から突出した台地の北西部に立地します。明治時代よりこの地で遺物の出土することが知られ、大正時代以降に実施されてきた発掘調査等により、旧石器時代から中世にかけての重要な遺構や遺物が残されていることが明らかにされています。また、日本における考古学の黎明期である大正時代に発掘調査が実施されており、日本考古学の礎となった遺跡の一つとしても重要です。

国府遺跡では、旧石器時代の道具類が豊富に出土し、そのうち特徴的な一群は遺跡名をとって「国府型ナイフ形石器」と命名されました。縄文時代および弥生時代では、多数の埋葬人骨が発見され、当時の埋葬方法や装身習俗などを知ることができます。飛鳥時代では、河内地域でも最古級となる7世紀前半創建と想定される衣縫廃寺があり、塔心礎が残されているほか、発掘調査で東回廊の一部も確認されています。奈良～平安時代では、河内国府に関連すると考えられる掘立柱建物群や硯などが見つかっています。

今回の追加指定候補地は、台地の北端部から急峻な崖となっている場所にあたり、各時代の遺構が展開する北限の場所と考えられます。また、隣接する場所の発掘調査成果から、特に河内国府に関連する遺構が存在することが予想されます。



国府遺跡 今回の追加指定地に隣接する地点で見つかった遺構  
(南から、写真右奥側が今回の追加指定地)【大阪府教育委員会所蔵】